

明けましておめでとございます。

本年もほつとたいむ通信を読んでいただき、少しでもほつと心の癒しになつていただければ幸いです。



「閉めない戸口」

小さな村の小さな家に母親と娘が暮らしていました。母親は日が暮れると、泥棒が来るかもと鍵をきっちり閉める人でした。娘は母親のように田舎でうずもれてしまう生活にがまんできなくなつて、ある朝、「お母さんへ 親不孝な娘のことはどうか忘れてください」

と手紙を残して都会へ行つてしまいました。

しかし、都会での生活は厳しくて、なかなか娘の思うようにはいきませんでした。

一〇年後、都会の生活に疲れた娘は、田舎に帰つてお母さんに会いたいと思ひ故郷へ向かいます。

一〇年ぶりの帰郷でしたが、家は昔のままでした。辺りはすっかり暗くなつていましたが、窓のすきまからはかすかな光が漏れていました。ずいぶんと迷つたあげくに、娘はようやく戸口を叩きました。けれども返事がありません。

思わず取手に手をかけると扉の鍵が開き、部屋に上がつてみると、やせ衰えた母親が冷たい床の上に一人で寝ていました。

思わず娘は、母親の寝顔の横にうずくまると肩を震わせて泣きまし

た。その気配で気づいた母親は何も言わずに娘を抱きしめました。しばらくたつて娘は母親に、

「今夜はどうして鍵をかけなかったの。誰か入ってきたらどうするの」とたずねました。母親は優しい笑顔で娘に、

「今夜だけじゃないよ。もしお前が夜中に帰ってきたとき、鍵がかかつていたらどこかに行つてしまふんじゃないか、そう思つてこの一〇年間ずっと鍵をかけられなかった」と答えました。

その夜、母娘は一〇年前に時を戻し、鍵をきっちりかけ、寄り添いながらゆっくり眠りにつきました。



今よりももっと良い環境があるかもしれないと思ふことがあります。確かに新しいことに挑戦するためには、環境を変えることが必要です。でも、以前の環境でお世話になつた人を悲しませたのでは、新しい環境でも成功しないでしょう。

会社を辞めるときに、新しい夢を見つけてみんなから応援されながら辞める人もいれば、何も言わずに逃げるように会社を辞める人もいます。

環境を自分の不幸の言い訳にするのは簡単ですが、その前に本当に環境だけが原因なのかを考える必要があります。

幸せは環境にあるのではなくて、心のありようで決まると思います。

「小さな幸せに気づく24の物語」より抜粋

株式会社 三悦

代表取締役 樋田 浩三

令和六年一月